

安全文化のバトンを未来へ

元ANA 機長  
山内純二さん

profile やまうち・じゅんじ

1946年 土居町蕪崎生まれ  
神奈川県横浜市在住  
土居高→武蔵工業大(現・東京都市大)  
1969年、全日本空輸株式会社(ANA)  
入社。30代で機長となり、60歳で  
退役するまでに国内線のパイロット  
として約16,000時間の飛行を経験。  
退役後は、全日空商事株式会社監査  
役や株式会社ANA 総合研究所理事を  
務めた。

乗員乗客517人の命を救った

奇跡のパイロット

命を懸ける仕事 パイロット

大学生の時に、飛行機が墜落したという記事を新聞で見、「一歩間違えれば命を落としてしまう仕事がある」、「命を懸けて仕事をしている人がいる」という現実には衝撃を受けました。自分もそんな仕事に就いてみたいと考えるようになり、それまで飛行機に乗ったこともありませんでしたが、パイロットの道を志しました。

死んでたまるか

1999年7月23日、私は、乗員乗客517人が乗ったANA 61便という羽田発・札幌行きジャンボ機に便乗乗務員(非番)として搭乗していました。離陸してすぐ、飛行機が伊豆大島の方へ向かってルート変更したことに違和感を覚えました。真っ先に脳裏に浮かんだのが「ハイジャック」でした。

まもなくして、客室乗務員から当機がハイジャックされたことを知らされ、私はコクピットに向かいました。鍵がかけられたコクピット内では、凶器を持った犯人が機長とともに立てこもっているらしく、乗務員たちは犯人を刺激しないよう外から様子を見ていました。直後、「テレイン、テレイン」

という音が機内に鳴り響きました。これは、「対地接近警報」と呼ばれるもので、鳴れば「墜落」することを意味します。次の瞬間、私は鍵がかかっているドアに体当たりし、コクピットに突入しました。「こんなところで死んでたまるか」。

高度1700フィートの死闘

コクピットに突入した私の目に飛び込んできたのは、目前に迫った東京の市街地と操縦席に伏せた機長の姿でした。飛行機の高度は1700フィート(518m)まで下がっていて、あと20秒で墜落するという状況でした。私は、意識のない機長に覆い被さり、操縦桿を全力で引っ張り続けました。「落ちるな、上げれ」と祈りながら。

私の祈りが通じたのか、機首が上を向き、間髪を容れず機長を免れました。機長の命を奪い、乗員乗客と住民の命を危険にさらした犯人は、私が操縦桿を握っている間に乗務員と乗客に取り押さえられていました。

緊急着陸した羽田空港で、飛行機を降りる一歩がなかなか踏み出せなかったことを覚えています。「飛行機が墜落しなくて良かった、乗客を死なせずに済んで本当に良かった」という気持ちで力が抜け、足の震えが止まらなかつたのです。

安全文化をつなぐ

事件後、この経験を伝えることが私の使命だと感じ、安全講話を始めました。一人ひとりが事件を知り、自分事として考え行動に結びつけることで安全文化を醸成し、そのバトンをつないでいくことができると考えたからです。これまでに開催してきた安全講話は、国内のみならず海外のANAグループなどを含めると60回を超えます。

しかし、人は知るだけでは行動できません。「知識」が「意識」になつて初めて行動できるので、「ありえない」ことは「ありえない」という目線で、日頃から高い安全意識を持ち、いざという時に大切なことは何かを判断して行動できる人が増えることを願っています。

夢と命を届ける

パイロットの使命は、乗客の安全・安心を第一に考え、人々の夢と命を目的地に届けることです。大変な責任を伴う仕事ですが、フライトが安全に終わった時の達成感は、何ものにも代え難いです。

いつか私の話を聞いてパイロットになりましたという人が、ふるさと四国中央市から出てくると嬉しいです。